バンドリ　After Summer

SK一YM

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然ガールズバンドＣｉＲＣＬＥにあらわれた５人の男バンドグループ、蘭たちＡｆｔｅｒｇｌｏｗはそれに困惑し…？

目次

1話　SummerSky ―― 1
2話　へこむわー ―― 10

1話　ＳｕｍｍｅｒＳｋｙ

1話

ＣｉＲＣＬＥ（サークル）の中でライブをしているグループ、Ａｆｔｅｒｇｌｏｗが壇上に立って、これから行われるライブのリハーサルを行っていた。

「蘭、そっちのマイク音通ってる？」

会場の真ん中でドラム担当　宇田川巴が声をだして確認する。

「うん、問題ない」

マイクを持っている人物、美竹蘭は大きく息をはいてスタジオの周りを見渡す。

「つぐみ、モカ、ひまりもセッティングＯＫ？」

「「問題なーし!!」」

青葉モカ、上原ひまり、羽沢つぐみの3人も大きな声で返事する。

（あとはライブを待つだけ…新しい曲も好評だといいな…）

蘭は少し緊張してココアを飲む。

「お、ここかなＡｆｔｅｒｇｌｏｗのライブ、間に合ったかな。」

一人の男がスタジオに入ってきた。

「誰だあれ」
「ライブって言ったから私たちのファンかなぁ。暇だしいろいろを来てくれるかたの話とかきくのもいいんじゃない？」
　そういって、巴とひまりが男子に近づいてった。
「もしかして、私たちのファンかな？」
「ん？そうそう！俺めっちゃファンなんだよ！最初のライブの時、偶然見てさ！それかいつも見てんだよな！もしかして、もう終わっちゃった？」
「え？まだ2時間くらい時間あるよ？」
「…」
　3人に沈黙が走る。
「ま、まあライブに遅れないことには変わりないからいいんじゃないかな…？」
　巴が男子にフォローする。
「あ、ああ…。お恥ずかしいところを…」
　男子は赤くなり、顔を隠す。
「あははは…、そういえば君名前は？」
「あ、俺？　おれは…」
『バン!!』

後ろの扉は大きく空いた。
「夏己！おまえまた勘違いで早くきたろ！」
「まああいつのことだから予想はできたけどな…」
「このあほ」
「まあまあ落ち着いて」
４人の男子が口々にしゃべり始めてぐだぐだし始めた。
「えーと、なにこれ」
ひまりが汗を流しながら巴に状況をまとめてもらおうとするが巴自身も何言ってるのかわからない等に肩をすくめる。
「あーごめんこいつら俺のダチなんだわ、おーいお前らこっちこいよー」
夏己と呼ばれた男子が４人を呼ぶとこっちに近づいてきた。
「おおー。ほんとにＡｆｔｅｒｇｌｏｗのメンバーだ。へぇー、ガールズバンドってみんな仲悪いイメージだったけど、全然ちがうな。」
背の低い男子は５人を見て感動している。
「すいません、もしかしてリハーサルの前でしたか？」
一番背の高い男子は申し訳なさそうに頭を下げる。
「い、いえ！全然！リハは昨日したので今はセッティングが終わったところなんです！」

ひまりがあわてて答えると
「ちょっと!・5人とも!・ここはガールズバンドのスタジオですよ!・男子がどうして楽器をもってきてるんですか!」
うしろからCiRCLEのスタッフの人が現れた。
「え?・でも今日からここ使っていいって月島さんから許可もらってるんですけど…」
男子の一人がこらえるとスタッフは『え?』といった顔で固まった。
数分たったのか、固まっているスタッフのうしろからここのオーナー、月島まりなが顔をだした。
「お、君たちそこにいたんだ!・よかったー、そこの男子5人は今日から特別にここを使っていいって話になったからよろしくね!」
ちょっとまて、いままで話してなかったんかい。
「ちょっと待ってください月島さん。」
「ん?・どうしたの美竹さん。」
いままで口を閉じていた蘭が声を荒げていた。
「ここはガールズバンド専用のスタジオなのにどうして異例でこの男子たちを使えるようにしたんですか?・わたしは納得できません。」
さすがお嬢様、決まりなどにはしっかりしている。だがあえてつっこもう。どうして

一部だけ赤なんだ。
「この5人はね、私がもともとスタッフとして働いていた別のスタジオで唯一やってたグループなんだけどね、私がやめてから潰れちゃったらしくて、申し訳ないなーって思って特別に許可をだんしんだー。」
　そんなんでいいのか月島さん。
「それならわかりますけど、その人たちでライブはできるんですか？私たちのファンっていうのはうれしいですけど、月島さんがそこまでして異例を出す必要はないと思います。ほかにもスタジオがあるんですからここじゃなくてもいいじゃないですか。」
　月島さんはまったく蘭の言葉に動じず、にこにこして
「大丈夫！この子たちは君たちと同等の実力と経験をもってるバンドだよ～」
「それはどういう…」
　蘭が聞くがそこで月島さんは手で制止した。
「あとはライブのあとね、いまはそれに集中しなくちゃ、じゃあ君たちはこっち来てね、手続きするから。」
「は、はい…えーと、じゃあＡｆｔｅｒｇｌｏｗのみなさん頑張って！、俺たち応援してるから！あとみんなのそのパーカーかわいいよ！」
　扉がしまり、沈黙が生まれる。

「す、すごい人たちだったね…」
「でも蘭があそこまで反対するなんて、どうしたの？」
「らんー、イライラしてるー？」
「…違う、早くチューニングしよ。」

　ライブが終わって客も帰ったころ、いま会議室にはＡｆｔｅｒｇｌｏｗと、月島さん、そして例の５人の男子が立っていた。ちなみに月島さんとＡｆｔｅｒｇｌｏｗが座っている。
「んじゃあ、ちゃんと説明しようか。アフグロはＳｕｍｍｅｒＳｋｙって知ってる？」
「私はしってるよ！蘭たちは？」
「私はしってる。」
「あたしはしらないなー」
「知ってるよ！」
「知らなーい」

蘭、巴、つぐみ、モカが答える。
「さすが美竹さん、ちなみにそれが何か知ってる？」
「はい、配信動画サイトで有名なバンドグループですよね？高校生の中でもファンがたくさんいて、再生数が毎回１週間で５００万回は稼いでいるグループで…でも、動画は静止画で、顔もわからないって有名なバンドです。」
「それでそんなすごいグループがどうかしたんですか？」
「そのＳｕｍｍｅｒＳｋｙがこの５人なんだ。」
「・・・」
「えええええええ!!!」
５秒後、ひまりとつぐみが叫んで驚いた。
「でも今回からはスタジオでするライブをやってくれることになったからってことで、特別に許可したんだよー。ふふふこれで予算がまた増える…！
じゃなくて、さすがに自己紹介もなしにはいそうですかはいかないからもう少しこのグループについて知ってもらおうかな。」
「え、ああ、自己紹介しろってことですか。
じゃあ…空から。」
「俺かよ！…えっと、葉月空ていいます、ベースをやってます。作曲担当です。つぎ敦

也。」
「指名かよ、風間敦也。ドラムやってる。沖田。」
「はいはい、沖田涼弥です。キーボードやってます。あと経営担当してます。それじゃ夕よろしく。」
「おう！俺は堂山夕！ギターやってんだ！担当、担当は…夏己のおもり役、んでこれが夏己」
「あいよ、日向夏己、ベースボーカルやってます、作詞やってるんだ。んでこの５人でＳｕｍｍｅｒＳｋｙです。よければ夏空でもいいからね、」
「夏空…夏、風、夕、涼、空…あっ、もしかしてこのグループ名の由来って…みんなの名前から？」
「ひまりさんピンポーン！みんな夏にちなんだ名字と名前なんだ！ちなみに空がそれかんがえたから夏空でＳｕｍｍｅｒＳｋｙネ！」
　夕が元気よくこたえるとひまりと『イエーイ』とハイタッチした。
「ちなみにみんなアフグロの大ファンだからよろしくね！」
『よろしくー。』
「んで…」
　突然夏己が蘭のほうに近づいていき、

「蘭、久しぶりだね、８年ぶりかな？」

「…え？」

蘭が固まった。

続く…？

2話　へこむわー

2話

「久しぶりだね、蘭ちゃん」

夏己が蘭に向かって言うと蘭含めその場にいた10人が驚いた。

『ええー!!』

「わ、なんだよ突然。」

巴が蘭を抱きしめてかばうように夏己を見る。

「もしかして蘭に復讐とかか⁉」

いや、それはないだろ。とみんなして共感した。

「いやいや‼そんなことするわけないじゃないか‼

ただ、蘭ちゃんとは親父同士が知り合いでさ、8年前に集まりがあってその時少し話したんだよ！」

巴とひまりが蘭をみるとどうやら困惑しているようでそのまま固まっていた。

「ら、蘭、大丈夫か？」

「おーい！らーん!!」

ひまりが揺さぶると我に返ったように意識が戻ってきた。そして夏己を見ながらあごに手を当てる。

「…たしかお父さんと一緒に知らない人の家に行ったのは覚えてるけど…アンタのことは知らない。」

そこまで蘭が言うと夏己が固まった。

「ぶふっ」

夕が突然噴き出して笑い始めた。

「夏己・・・ドンマイ・・・ぶふっ」

肩をたたきながら笑いをこらえている。蘭がふと夏己を見ると寂しそうな顔して下にうつむいていた。

「えっと…ら、蘭は人見知りでさ、たぶん夏己…さんと同じで学校の人も覚えていないくらいだからさ、そこまで落ち込む必要はないとおもう・・・よ?」

巴がフォローするがなかなか顔を上げない夏己

「夏己!しっかりしろよ!そんなことでいちいち落ち込むなよー!」

バンバンと背中をたたいて涼弥が夏己を慰める。

「別に…落ち込んでないし」

下を向きながら夏己が答える。

（絶対落ち込んでる）

またもやその場にいた全員がそう思った。特にアフグロのメンバーが思ったことは『蘭と似てるなぁ』

落ち込みは違うがこのひねくれた返し方がまさに蘭にそっくりなのだ。

「えっと夏己…さんごめんなさい。」

蘭が丁寧に謝るとバッと顔を上げて

「大丈夫！これからも会うんだし少しずつ打ち解ければいいとおもうし！ズビッ」

お分かりかと思うが少し涙目の夏己は空元気で答えた。

「ま、まあそうだよな！これからこのスタジオでライブもするわけだし合同ライブの時にも一緒にするだろうしな！」

場を和ませるために会話を新しい方向へ向けた。

「え？合同ライブ？なにそれ面白そう！！」

夕がグイっと巴に近づく。

「あたしたちがつかってるこのサークルで季節ごとに５つのバンドで合同ライブするんだよ！あと４チームは今日は来ないけどな。夕さんたちができるかはまりなさんに聞かないとわからないけど」

ＳｕｍｍｅｒＳｋｙの５人はものすごい勢いでまりなさんをも見る。

「ん？できるよ？ライブもしてもらうんだから合同ライブに参加してもらわないと困るしねぇ」

『是非！お願いします！』

机を乗り上げ返事する。夏己なんてもう1メートルも空いてない距離でまりなさんに近づいている。

「ちょ！夏己！近いよ!!」

空が夏己をまりなさんから離す。

「ま、それもかねてね、スタジオのセッティングにいろいろと男手も必要だから手伝ってもらうけどね！あっだからってスタジオ代は安くしないからね！」

さすがまりなさん、ちゃっかりタダで手伝ってもらおうとしてる。

『もちろんです！ありがとうございます！』

「まあ正直言うと今働いている子たちが大学が忙しくなるみたいで一週間後にやめちゃうからね、ちょどよく君たちが転がり込んできたからたすかったよ～

じゃあ今日はもう遅いし解散しましょ！みんなくらいから気を付けてね！あと蘭ちゃん！」

まりなさんが蘭を呼ぶと

「夏己君は蘭ちゃんのお父さんにあいさつしないといけないみたいだkら一緒に家まで

連れて行って!!」
「お、お父さんにですか…?」
「うん、さっきも言ったけど親父が仲いいから戻ってきたことを報告しにいかないといけないだ。たぶん俺の親父も一緒だと思う。」
「ま、それならいいよ。あたしは家に帰るだけだし。」

「ジャーねー!蘭ちゃん!夏己さん!」
　ひまりとつぐみが手を振って走っていった。
「俺たちのことは呼び捨てでいいよー!!」
「わかったー!またねー夏己ー!!」
　2人が見えなくなると蘭がどんどん歩いて行った。
「ちょ…蘭ちゃん!!待ってよ!」
　夏己もあわてて追いかけるが蘭は無視。数分歩くと突然蘭が振り返り
「あたし、あんたのことほんとに覚えてないの、だから気安く呼ばないで」
「・・・わかった。」
　一息の沈黙が流れた後夏己は答えた。

「じゃあ俺はすこし後ろから歩くことにするよ美竹さん、君に迷惑はかけたくないしな」
夏己は蘭と１０メートルほど離れて歩き始めた。

蘭が家を見つけると何やら黒い車が止まっていた。
「なにあれ…」
「お、なになに?」
蘭とすぐ後ろで夏己の声がすると
「うわあああ!!」
と蘭が叫んであとずさりした。
「…もしかして三竹さん俺の存在忘れてた?」
「そ、そんなことないし…」
「どうした蘭⁉」
「あ、お父さん…」
蘭の家から蘭の父が走ってきた。